

會



報

1956年11月

189

日本山岳會

六甲登山大会

村井米子

秋晴れの十月二十八日(日)神戸湊川公園の朝は、千人に余る岳人のどよめきに明けた。昨夜から雨降下をお迎えし、今日第十一回国民体育大会の開かれんとして、神戸全市の中でも、この群衆は特異なもの、といえるだろう。別にどこの選手というわけがなく、たゞ山を愛するがゆえに近県から集った老若が、千人を越えようとは……。

「これでもだいぶ断つたのです」と、兵庫県山岳連盟会長津田周二氏はいかにも嬉しげである。高校生や若人ばかりでなく、杖つきながら大先輩たち七十才以上の方々まで、珍らしい顔をそろえられた。遠い土地からの参加もあった。

国体協賛、国立公園編入六甲山系全縦走登山大会は、このようにして兵庫県山岳連盟主催、兵庫県、神戸市、兵庫県及び神戸市体育協会後援のもとに、花々しく開催された。

健脚向のA組は、湊川公園から鳥原水源地を經、菊水山を登り初めとし摩耶、六甲、舟坂峠から宝塚まで三十軒余、十時間行程だ。B組はその半途、摩耶山までになつてはいるが、この希望者は百人に足らぬ。

来賓組のわれわれも、B組と同じコースを歩こうと決めた。開会式後午前八時、五十人づゝを一班としてリーダーに守られ、

一列になつて公園を出てゆく隊列は、実に驚くばかり長い。日帰りの行程のゆえもあるが、千人余という人数は、これまでの国体登山にも無いことだつた。この大会を執行するに至るまでの、津田さんたち主催者側の苦心はこれだけでも報いられる心地がする。

神戸山岳人の長老がたも、大部分この列の後につかれた。小島鳥水氏令弟、小島栄氏の元氣さにひきまづられ、片脚が悪い中原繁之介氏まで杖つきながら、六甲大通の直木重一郎氏に先導される。遠来の客は、金沢の龜田与三郎氏、四国の十龜太郎氏と東京からの私、なお九州の北田正三氏も参加されたが、A組志望で先発された。

バスの走る市街地から、十五分も登るとすぐ裏の山合いに入る神戸という港町は、実に羨しい。すつかり山気分につけて、明治二十三年三十年代の山の話、ウェストン師たち外人登山家の話を、長老たち何いながら歩く、これも神戸の山の味と感ぜられる。

小一時間で十文字峠へ出ると、有馬道が目の下に走り、北方に盛り上つていく草山の菊水山を、蟻の列のように縋々と登山隊が登つていく。先頭はもうこのを降つて次の鍋蓋山に入つたという。これも一つの壯観である。やゝ急な登り道なので時間がかかり、後のほうは腰下ろして待つてゐる。これで千人の大作進が、首尾よく日の暮れまでに果せるだろうか……いさゝか心配になる。

菊水山頂は標高わづか四五八・九米だが、東方の六甲登山から、西方鴨越や鷹取山、北方の円波路

の山々、さては、脚下の神戸港はもとより、はるか明石の浦にかけての海岸線まで、実に眺望が雄大だ。

神戸という都会には、毎日登山会というものが沢山ある。毎朝の出動前に、それこそ雨が降ろうが、晴降ろうが……あの昭和十三年の大水害の日にもさへも、登つていながらあるとの話も、かゝる山がすぐ一、二時間行程に恵まれていくゆゑと思われ。

菊水山の降りにはなかなか急で、紅葉した樺木の枝につかまりながら、ぐつと有馬道までくだつてしまふ。それからまた改めて四八五米の鍋蓋山まで登り、再度山へ出てまた下り、布引流上流を渡つて市ヶ原から、いよいよ摩耶山の尾根にとりつのである。今日の標高差を加えてみると、千五百米にもなるのだ。ケイブルの六甲山という概念とは、だいぶ懸け離れた山道である。森林も美しい。

再度山の善太郎茶屋は、明治元年生れの善太郎翁が二十五年頃に開いてから、神戸の登山家に親しいところ、まだ七十位にしか見えぬ翁に話をききつつ、お弁当を食べた。

摩耶山の登りは花崗岩のくずれた急坂で、稲妻坂、天狗道などの名もある。左手は木深い山つゞきだが、右手が開けると急な崖の下に神戸市街のぞかれる。

団体会場王子グラウンドの人の波から走るのは見えアナウンスの聞えたのは、いさゝか都会色に近い。途中ずいぶんゆつくり景色を眺めて腰を下ろし、昔からの六甲の歴史をきいて時間をとつた

が、午後三時約六時間で摩耶山に着く。堂々たる摩耶山荘が、樺皮に赤々と火を燃いて、うれしい山気分である。

やがてケイブルで登山組の長老三木高峯氏、西岡一雄氏、山陰からの佐野勇一氏も着かれ、北田氏も六甲山まで戻つて来られた。炎を囲みながら、新田氏の話が限りなく続く。津田氏は役員も参集、夕食後の早を囲んで四十人集りの懇談会がたけなわのころ、電話のベルが鳴つた。A組の先頭宝塚着は午後四時五十五分(これは高校生が主でずいぶん飛ばしたらしい)後尾は六時四十五分、八百七十九名が無事に全縦走を遂げた報せだ。

中途から、乗物便をかりた人も少く、病氣や過労もほんの数人に過ぎず、大部隊の登山として誠に美事な成果を挙げた。(女子参加は約一割)一同思はず拍手の雨。さて津田氏司会の下の話の中でも、三木氏、西岡氏の昔話、小島栄氏の日本山岳会の生れるころの秘話、二木氏のアメリカの山の昔山本吉之助の六甲森林植物園に世界の針葉樹を集める抱負など忘れがたく、また津田氏の大坂第一回国体以来、金沢を龜田氏の、九州を北田氏、東京の富士を私、大山を佐野氏、石鐘を十龜氏と、それぞれ語り、前田副会長が団体への考え方を述べられたのは、全国登山人の要望を暗示している。会後ボーイチから見下ろす神戸の灯火のモザイクも、実に美しい印象をのこし、よき一日のよい結びであつた。

今度、マナスル登頂隊員の一人ガルツェン君を迎え得たのは誠に慶ばしいことだった。

過去のマナスル隊員の話などによつても、初めてシェルパ達と会う時は、まるで新入部員を迎える時のような気持だったとか、彼らが如何にも忠実に立ち働いた話を聞いていた

ので実際に接して見たいという気持は誰しもあつただらうと思う。

山が育ちの彼にして見れば東京の賑わしきには聊かビツクリたようではあつたがホテルの屋上から見える議事堂を眺めてチョルテンだと思つたりするところは矢張り彼らしい一面でもある。日光の東照宮や奈良の大仏の前では地に

ガルツェン君を迎えて

成瀬岩雄

彼の歓迎会での挨拶はチベット語であつただけに彼としても思ふ存分語り得たようであつた。

幸い多田先生の御好意による通訳によつて彼の真意も知る事が出来たが、一言にしていえば彼の純情さを正しく知ることが出来たよ

続・ナイロンロ

ープの摩耗試験

金坂一郎

前稿の実験の結果、ナイロン・ロープは、マニラ・ロープほどではないにしても、長さの方向の摩耗に対しては案外強いということが明らかにした。しかしこの実験はナイロンの特性の一つを調べたものに過ぎず、いわば学術上の報告ともいふべきもので、登山技術に関する報告のものではない。

しかしながら、登山者が登山者のために研究においては、実技との結びつきなくしては不親切であるし、また誤解を生じる恐れも

伏して参拝したという。彼が常に口にしていたことは日本は仏教の盛んな国だということだった。

奈良で鹿寄せを楽しみ、ダーヂリンに帰つたら是非チンジンに「日本に來たらまず奈良に行け」というのだといつていた。

うな気がした。しかし何んといつても当夜彼の胸に光つていたタイガーパツヂには、我々は何としても一言もないものだった。名誉市民の鍵や勲六等なども大したものには違いないが、あの日、あそこではタイガーパツヂの方が燦然たるものがあつた。彼のア

ジにおける超人的活躍やマカルー、マナスルの歴史があつたタイガーパツヂの中に秘められているのだから。

ダーヂリンに帰つたら日本の話をするのに幾日掛るか判らないといつていたが、これが彼の別れの言葉の一節であつた。

食いこめば、制動確保はおのずから不可能になるであらうし、鋭い刃の場合には、前稿においてもふれておいたように、綱は至つて弱い。もつともこれはナイロンに限らず、マニラに対しても或る程度いえることである。

ところで、実際の岩場での墜落は、実験室における切断試験のようは一筋縄ではいかない。元来綱の結び目と二つの間に減少させるものだから、綱の切断試験においては、結び目があるときは、必ずといっていいほど、その結び目で切れる。

ところが Meurs の行つた、英、米、スイスその他における、登山中の綱の切断例の調査によると、分類の割合はつきりした六五例の中で、結び目近くで切れたものは、

わずかに四例に過ぎない(注四)。ということは、実際の山の墜落の場合には、綱が岩にこすられたり食いこんだり、また落石に打たれるとか、その他の原因が大きくなる現われ綱が単純な張力で切断することはむしろ珍しいくらいだ、ということの意味する。また同じく Meurs が、実際にリーダーの墜落を阻止した綱を、現物について調査したときも、その綱の多くが岩によつてむしろ切られていたことでも実証される(注五)。

リーダー墜落の場合、綱の切断の殆んどが、以上のような偶発的な事故によるものであるとすれば、前記したような欠陥を持つナイロン・ロープの岩場での使用は、大いに疑問とされなければならない。

ナイロンの岩場での使用は問題があるとして、しからば冬山ではどうかということになるが、前稿(注一)の事故は三件とも冬山におけるものである。岩を全く見ない山というものは、日本の冬山どころかヒマラヤにもないのであるから、程度は異なるにしても、何所で使う場合にもナイロンの欠陥はつきり意識されなければならない。現に今回のマナスル登山でも、黒岩の所にかけたナイロン・ロープの縄梯子の場合、岩にすれた所がひどく傷み、麻紐をまきつけて保護しなければ、使いものにならなかつたという事実もある。

とすれば、ナイロン・ロープは岩場のみならず、山登り全般に使つてはならぬのであるうか。登山者の装備に対する要望からいへば、綱はどんな場合にも、ま

た、たとえばどんな使い方をしても、切れては困る。

しかし登山が工業ではなく、スポーツである限り、要望は要望として、装備の不備は技術をもつて補わなければならない。

ところで、ナイロン・ロープの事故や欠陥については、前稿に述べた外、松方さんのお話によると、最近英国以外の国において、数多く現われているそうである。英国では有名なナイロン・ロープのメーカーがありながら、松方さんの訪英当時は国内では販売せず、殆んど輸出にまわしていた(注六)。これではナイロン事故は現われない筈であるが、最近の英国における文献がしばしばナイロン・ロープに言及している以上、このごろでは一般にも使用されているのであろう。

次に、これは英国においてナイロン事故が少いことと、直接の関係があるかどうかは、実証するようすがないが、少し思いあたる問題があるので、ここに紹介したい。

ヨーロッパの登山術には、英国流とその他のヨーロッパ大陸の国に行われる大陸流とも称すべきものと、大きな二つの流れがあるようだ。英国では必ずしも英国流に統一されてはいないらしいが、ここに筆者が英国流と称するものは、ヤングのマウンテン・クラフトを代表とする登山技術の流れである。

いま確保法について、この流儀の特徴を見ると、直接確保を極端に避けようとするものである。ここにいう直接確保とは、行動者と

確保者との間の active rope を、岩やピトンのような弾力のないものにひっかける確保法で、かつて筆者が力学的に定義した直接確保は、その極端な場合である(注七)。

直接確保の危険は、綱の切断を増すことである。これに対して間接確保とは、アクティヴ・ロープを岩角のような剛体に近い物体にふれさせることなしに、行動者の墜落を綱の弾力と確保者の弾力、または綱と確保者その他の摩擦によつて確保する方法である。ヤングは経験的に、間接確保を忠実に守つていれば、非常の場合おのずから、最も効果的な間接確保たる制動確保が実現されることを知つていた訳で、綱と確保者の弾力だけでは、とうてい確保不可能な墜落をも阻止することができた(注八)。

また前稿及び「岳人」にも紹介しておいたことであるが、スリングの使用は英国人のピトン嫌(ピトンも直接確保の一種である)が生んだ方法で、英国流の間接確保重視の一つの現れである(注九)。スリングそのものには大した緩衝作用はないにしても、少くともアクティヴ・ロープが予期せざる岩角や岩溝にふれることを大に防いで呉れる。

つまり間接確保は、綱そのものの耐衝撃力の弱さを補い、岩場での摩擦を防ぐばかりでなく、リーダーが墜落の場合に、綱が岩角にふれたり、V型溝に食いこむような、偶発的事故を減少させるものである。

これに対して、本邦における登りの慣例はどうであらうか。ヤ

ングのマウンテン・クラフトは本邦において、登山術の新約聖書くらいに尊重されていることは事実であるが、その中に強調されている間接確保の重要性はさしてかえりみられることなしに、流儀としてはむしろ大陸流で、割合気やすく直接確保を使っているのが現状である。これでは当然直接確保から生ずる事故も多い訳で、綱の傷みかたも激しいことになる。従つてナイロン・ロープの欠陥も、一層現われやすいものと思わなければならぬ。

つまりナイロン・ロープが登山に使えるかどうかという問題は、使用者の心構えとその登山のやり方によつてきまることが、綱だけを議論の対象とするのではできない。いまここで筆者が、実技上の結論を要求されたとしても、その返事は相手によつて異なるであらう。

もしクライマーがいい加減な教科書に書いてあるやり方を真似するだけの程度であるならば、ナイロン・ロープの使用は断然お止めなさい、とアドヴァイスすべきである。山登りについてはしっかりと信念を持ち、自信のあるやり方をしている人ならば、こちらでは資料だけを提示して、自らの判断を求めることになる。

聞くところによると、スイスのガイドがお客を案内するときは、綱はナイロンと麻の両方を携行するそうである。これは恐らくナイロンと麻のそれぞれの長所、短所を見きわめて、これを生かして使おうというものである。これなんか一つ解決法であらうが、

アマチュアの登山者、ことに経験の比較的浅い人たちにとつて、その実現はかなり面倒なことではあるまいか。

ともあれ、技術と装備の兼ね合いは、いつの時代にも論争の種となるべく、簡単には割りきれない形而上の問題を残すが、綱の場合、どうしても切れるは困るのであれば、アンザイレンをやめてしまふか、或るいはかつて Farret が述べたように、うんと太いマニラ・ロープが針金で作つたワイヤ・ロープでもひきずつて歩け、という言葉でも引用する外はない(注十)。

(附記) 前稿(注二)に関するナイロンのスリングの弱さについて、前稿ではナイロン・ロープが互に直交する場合の摩擦熱による弱さと推定したが、スリングはカラビナをとまなうのが普通であるから、スリングとアクティヴ・ロープが直接ふれることはなく、これはナイロン・スリングの岩角における剪断力に対する弱さと解すべきであらう。

また前稿において子繩(yarn)とあるは、子繩(strand)とすべきものである。

なお登山術の流れ、ことに直接確保と間接確保との問題について本稿においてはまことに舌たらずで、意をつくせぬうらみも多いがこの問題については、機会を得たら再び詳論したいと考えている。

とに角、確保のように危険をともしないやうな行動に関しては、注意に注意を重ねたつもりでも、うつかりすると最悪の事態に陥りやすい。この点は広い視野からの検

討が望まれるので、本稿についても、各位の御批判を切にお願いしたい。

(注四) R.P. Mears, Experience with Climbing Rope, Alpine Journal, 58: 282, p.p. 89.

(注五) Mears, op. cit., p.p. 93.

(注六) 松方三郎「山の周辺・欧米とどこころ」(山岳四六・四七年)

(注七) 金坂一郎「確保論」(山岳四八年)

(注八) G.W. Young, On High Hills, pp. 182.

(注九) 金坂一郎「ハーケン、カラビナの科学」(岳人一〇二号)(注十) Mountain Craft, 1920, pp. 94.

パーキイ氏 印度のヒマラヤをかこむ会 本会が十月二十日午後四時から本会ルームで開かれた。一九五三年モリに試登した話などなかなか懇談が行われた。同氏から次のような挨拶があつた。後プモリの天然色映画が映写された。

「印度人はヒマラヤに関心が薄いようにみえるがそれはちがう。一万九千呎のカイラスへの巡礼は有名だし、自分がヒマラヤに関心を持つようになったのもカイラスに行つてからだ。日本のマナスル登山成功には心からお祝の言葉を述べたい。きょうその同じヒマラヤに登る趣味を持つて兄弟の日本の方々とお会い出来て兄弟のように思える。印度人はたゞ山に登ることをスポーツとしてでなくそれ以上の精神的な意味を重くみている。」

みんなのコース 富士山 紅葉 台台山 石割山

ハイキング直通電車
東京発23時33分(休日前夜)

ハイキング臨時バス
各コース行、河口湖発4時(休日)
(石割山は富士吉田発)

お問合せは……東京支社(20)4076・案内所(37)9644

富士山麓電鉄

“壕を繞らした山々”

吉沢 一郎

四百磅(約四十万圓)の金と、四カ月の休暇をひねり出すことの出来る人間は、日本でない英人の国でさえも、なかなか難しいことらしい。しかもそれが出来た四人の登山家が集つて、巨峰とまでは

いえないまでも、マナスルの南方、ヒマール・チュリーそのまた南に聳える六、六七二米(二一、八九〇呎)のパウダー峰(Baudha)に試みた遠征の記録がこの本の内容なのである。

この四人は四人ともに、スエズ以東には足を伸ばしたことのない人達ではあつたが、本来の登山という面からすれば、皆優れた経験者であつた。

隊長のショウエル・スタイルズ(一九五四年は四六才)は、ものを書くことが主な商売で、歴史小説や Glyn Carr というペン・ネームで発表する山岳を舞台とする探偵小説、それから登山関係の本などを出している。

なかでも Mountaineer's Week End Book, Mountains of the Midnight Sun, Introduction to Mountaineering は広く登山家の間に知られている本だそうで、その他にも A Climber in Wales, A Guide to the Malta Climbs など、いろいろ本を出しているらしい。

現在は北ウエイルズに住み、遊覧船の経営や作曲、少年団の訓練などをやつており、時にはそこで職業的なガイドにもなっている。ヒマラヤン・クラブの会員で、ミッドランド山岳会にも籍をおいており、登山としては故郷の山々の他にアルプス、ピレニ、ノルウェー、アルジェリア等にも足跡が行きわたつてゐる。特に極端にあるノルウェーの山には二度も、小さな遠征ではあるが行つてゐる。

中央アジアの高岳への遠征のために彼は十年間貯金を続けた。インドへの入国許可を取るためには三年間を要した。北チトラルの入国にも二年の間執拗にねばつたが、遂に不許可に終つてしまつた。最後にネパールの入りが駄目となつたらスピテイの国境にあるマニラン峰とツムツム峰に行くことになつてゐたが、どうにかネパール入りが許可になつたのでその必要がなくなつたわけである。

同行の R.W. Wilmer は三十七才で有名な登山家、スタイルズの登攀仲間である。Jack D. Derry は二十六才、歯科医、Philip L. Barrett は電気技師。

シェルは四人。ダウラー・ギリーへ行つたギヤルツェンがサード、ニマ・スタンダルは料理係、一九五二年にスイス隊に征つてサウス・コルへ登つたダ・ノルブ(略称ダヌー)も参加、それにカミが備わつて行つた。

四月の二十日にカトマンズを出発、五日目にアルガート・バザールにつき、北部クンチャでは重要な部落となつてゐるシランダラに

は八日目に到着した。こゝは東側をダロンディ・コラが、西側をチェベ・コラが流れる尾根の背にある。これから一行はダロンディ河を遡つてカトマンズから十一日目で、少し低い高度約四、二〇〇米の Wuthering Heights に辿りつき、こゝを B.C にした。

かくて五月一日、B.C の最初の朝を迎える。この日からいよいよ攻撃行動を開始したが、天候にはひどく恵まれなかつた。朝は快晴でも十時頃になるともう雪が降り出し、視界は殆んどゼロになつてしまふ。猛吹雪に何時間も襲われてテントの柱にしがみついていたことに何度かあつた。

それに地形が非常に複雑で、宛で深い壕で囲まれた城の上に目的の峰頂が突出している。パウダーの北尾根はヒマール・チュリーに続き、東尾根はルピナ峠に下り、西側は壁、南へ尾根らしいものが出ているがこれはシェルパの話によるとダウラー・ギリーの壁よりひどいものである。

南尾根には彼等が鋸壁尾根と名づけた尾根が東西に延びてゐる。これも試みたがその交点までさえ登れなかつた。

次にこの鋸壁の北側にある棚氷河から南尾根を目指したが矢張り駄目で、尾根の上の一凸地(約五、三〇〇米)に登つてみたところ、これと最高峰との間に深いギャップのあることを発見して退却した。

最後に攻撃隊はルピナ峠を越えてチューリン河の上流に下り、パウダー峰北側の氷瀑を探つたが遂に力つて登頂に見きりをつける

ことになつた。

マナスルとガネツシュに失敗した堀田隊の一支隊にぶつかつた時のことがこの本の一九〇頁に書かれている。

「……チューリン・コラに下つて、さつぱりした水色の登山服をつけ、見事な英語を話す愛嬌のいい紳士達に歓迎されたのはウイلمとデリーにとつて全く思いがけないことであつた。と同時に、五人からなる強力な日本マナスル遠征隊の隊長も、不可能だと思はじめていた山稜の雲の中から、たつた二人のサヒブと二人のシェルパからなる英国からの遠征隊が突如として現われて来たのには、可なり胆をつぶしたことであろう。というのは、日本人達は、一緒に連れて行つたシェルパ達が、難しうに危険でもあると断言して越えることをこぼんでゐた、ルピナ峠越えについて協議している真最中であつたからである」

日本隊から色々御馳走になつたことも細かに書いてあるし、別れる時に日本人はハモニカを出して、オールド・ラング・サインを吹いてくれた、なども書いてある。その時の写真も一枚ある。

かくてウイلمとデリー組は五月二十九日よいよいブリ・ガンダキを下つてカトマンズに向い、一方バレットとスタイルズはウザリング・ハイツを二十八日に後にしてダロンディ・コラを下つて行つた。

結局英国隊の到達点は鋸壁尾根での約五、四〇〇米が最高のものとなつた。パウダーからヒマール・

チュリーにかけては、山は非常に難しいものになつてゐるようである。
 “The Moated Mountain”, by Showell Styles, London, Hurst and Blackett, 1955, pp. 255, 18S

多田等観先生と

チベット紀行

確か昨年の二月頃だつたと思うけど、川口慧海師拾回忌の講演を小集会で催した時、多田先生のチベット入りの御話は我々司会者として何故速記を取つて置かなかつたかと後悔したものだが、今度漸く先生の「チベット僧院生活十年」(仮称)として上梓されることになつたのは何としても喜ばしい。

内容については先生がチベットに入らるる動機から始まつて、ライラマ十三世の寵愛を受けて、ラツサの三大寺院の一つたるセラの寺院における苦業の様を述べられ、チベットにも文化があるということを強調されている。ハラーのチベット七年ではないが当時はイギリス官憲の眼の光つてゐる時でもあり、入国には非常な困苦を共にされたこともよく書かれてゐる。

多田先生は人も知る如く謙虚な人性格であり、この書の内容も遂に陽の目を見ずして筐底に附せらるるのかと我々も案じたがここに毎日新聞社の慧眼によつて上梓の運びとなつたことはあらためて毎日新聞社に対して敬意を表する次第である。

(成瀬岩雄)

失われゆく黒部溪谷の美観

冠松次郎

黒部川第四発電工事がいよいよ開始される形勢となった。第四発電工事の地域は、仙人谷落口から上流十キロ、白竜溪、御前谷、平、東沢を連ねる約二〇キロの溪間においてである。この地域こそ古米人跡未踏とされていた絶勝下廊下を含む黒部峡谷の核心地帯と称すべきものである。

黒部峡谷は下流から第一、第二、第三と発電施設が完成され、本年度より巨額の経費をもつて第四発電所の工事に着手せんとしているのである。

第一、第二ともに風致に非常な影響を及ぼしているが、第三に至つて溪谷は全く荒廃してしまつた。第三発電所のある樺平から仙人谷落口までは約七キロで、この間は奥鐘山一、五〇〇米の大山壁をめぐつてシジミ坂、シャイ谷、オリオ谷、餓鬼谷等の支流の合流するところ皆捨て難い美観をもつていた。溪側の急な割に森林は深く、直線知に流れてくる溪流もまた美しかった。この地域は下廊下の一部と見るべきもので、山側が高く峻しいため、ナダレや落石の危険を考へて、電力では殆ど全部トンネルによつて上流に連絡している。

トンネルに眼かくしされた旅客は、樺平から仙人谷の間の溪間を

見ることが出来ないばかりでなく、かりに覗いて見たところで谷水のない岩屑だらけの溪の景色は全く観賞する値のないものとなつた。しかもこの間こそ、ある少数の登山人が見ただけで、一般からは知らない間に抹殺された部分である。

水力電気ではこの間に軌道施設さらに上流へ棧道をとつてつけた。今まで一般の人の入れなかつた深い谷奥が見られるようになったことは水力電気のおかげだといふこともうなづけるが、私はその代償のあまりに大きなに戦慄するものである。

× ×

もし第四発電所の工事が着手されたとすれば、仙人谷落口から上流約二〇キロはどう変つて行くか。まず御前谷落口の上手は一八〇米の堰堤を築造し、龍川谷から赤沢岳を貫いて大トンネルを穿つて築造の資材を運ぶ。上流の御山谷、平、東沢に至る約一二キロの大渚水池を造り、せきとめた溪水を後立山側の山腹にトンネルを穿つて下流へ誘導し、東谷落口の上手に発電所を建設するという。

電力では観光登山シーズン（それは恐らく七月中旬から八月下旬に至る間と思われる）には適當の放流をするといつてゐるが、高大なダムによつて大部分を水路に取られた水の僅かな量が放流されることは必然で、黒部の生命である空の色に見まがう程の碧流の豊さは最早下廊下には見られなくなるだろう。

黒部の観光シーズンは秋である。道のなかつた頃谷渉りで行く

のには八月下旬の減水期を選んだが、道の出来た現在では十月中旬から下旬にかけては黒部を見るのに絶好の季節だ。しかしかんじんのその季節は減水の絶頂に達しているので放流ということは恐らく不可能だと思ふ。

立山、後立山の高い峯々が新雪に輝き、黒部の溪が朱泥に埋められ、その底を流れる碧流は秋こそ溪に美しく。新雪の山と紅葉の溪と碧瑠璃の流れこれが黒部の秋のトリオをなしているのである。そのトリオの一つである碧流がなくなり無能河流となつた黒部を想像することは悲しい。

× ×

黒部奥の山は、全部原始林である。古米伐採が入らない処女境である。溪の峻しい高い山々に囲まれている黒部では、伐採してもこれを運び出すことは容易でなく、谷を流そうとすれば下流に至るまでには用をなさないほど損じてしまふ。それだから今日まで人の手によつて殆ど伐り出されていなかつた。黒部奥には金鉱がありモリブデン鉱もあった。しかし、これも土地の遠隔、道の難渋のため皆廃鉱となつて今日に至つてゐる。それだから今日までは黒部は黒部自身によつて護られていたのである。

しかし水力電気という近代科学の営力にはさすがに黒部も死をぬいた観がある。日本随一の急流（電力会社の発表による）である黒部は延長の短い割に周囲の山々は皆二、五〇〇米から三、〇〇〇米に至る高峯で、しかも積雪量の多いこの山地では夏なお水雪によつて埋めつくされている谷々も頗る多

い。花崗岩質の岩壁は堅牢だが一度それをつつてしまえば割合に崩れる惧が少い。そういう種々の好条件が水力電気にお訴へ向きの好資源をなしている。自然保護、風景護の關係者が今日まで随分反對をつつけて来たが、今度はどうも防ぎようがないらしい。

× ×

日本に比類ない名溪黒部、國際的にも誇り得る黒部峡谷を水力電気によつて荒廃せしめることは誠に忍び得ない。国家の経済、國民の生活を考えると電力の需要は避け得られないといふことはいうまでもないが、黒部ほどの谷は他に電力開発の余裕のある限り最後までとり残して、火力発電の拡張、原子発電の効果によつて保存出来ればと希うものは私ばかりではあるまい。（昭三一・六月稿）

飯豊山と早池峰山

村上金吾

磐越西線山都駅下車、一ノ木までバス、木地師の部落川入を経て長坂をのぼり横峯、地蔵の小屋を経て剣ヶ峯をよじると三國岳の県営小舎で、前面に夷川源流磐谷をへだてて、大日岳、西ヶ岳そして飯豊山がそびえ、ふりかえる

と遠く磐梯、吾妻、蔵王などの山々が斜陽を浴びて見えています。あすの天気も大丈夫だろうと切合小屋までの予定を変更してここに泊りました。ところが翌日は急に荒天です。種蒔山、切合小屋を経て飯豊山頂上の神社に泊めてもらうことにしました。そして西ヶ岳、大日岳へ往復の機会をねらつ

たが、風雨は烈しくなるばかり、まる一昼夜どこへもゆけません。翌日ヌクミ平、長者原へおる予定を変更し切合まで戻つて、そこから地蔵岳を経て中津川へおりました。途中トラクに便乗しましたが、下屋地の終発バスにすこしのところまでにあわず、幸いそのトラクが米沢までゆくというので、そのまゝ乗つてゐると、四時間も走つてから山の中で故障です。予定しないので地図を持つていず、日は暮れるし困りました。それから戸長里というところに出てバスに乗り米沢に出ました。単独行でした。

◇

飯豊山から帰つて半月後、早池峯山へ出かけました。釜石線遠野駅下車東原までバス、大出、大野平、まで一滝を経て小田越の少し手前にある河原坊（地図になし）小屋で泊り、翌朝登頂。この遠野口は早池峯山の四つの登山口のうち最も整備されたよいコースです。下りは大迫口の河原坊に下り、岳を経て落合（地図になし、覚久廻り近し）からバスで大迫に出ました。最近ある山岳雑誌に早池峯の登山案内が出ていますが、登山口も平津戸口と大迫口だけしか書いていませんし、バスの運転区間などもいつの資料で書いたものか、かなり違つていますから注意を要します。

物品寄贈

図書室用カーテン二張り

土曜会 神谷 恭氏

日本の登山 形態概説

沼井鉄太郎

これは前稿「登山の記録といふもの」の実際上の続編である。

登山の実際行動には必ず二つの重要な点がある。曰く根拠地または基地、曰く山頂または最高到達地点。そして根拠地は常に出発点ではあるが、必ずしも帰着点または終点またはゴールとはならないことがある。発着同一の根拠地がある登山行動を往復登山といふ、その内同一路線に添つての上下形態を単式往復登山、往路復路互に異なるものを復式往復登山と区別してみよう。

単式（または単線式）往復登山は登山発達史の過程においての基本であり原型であるとも考えられ、一箇の山岳についての登山史的初期形態ばかりのものでもなく、個人々々の登山振りの自然的発展においても、指導者を混えない自立登山行動ではまず第一段階に採用される普遍的形態である。ヒマラヤなどの未踏高峰でその内容は複雑な極地法登山であっても、結局大要は単式往復登山形態が採用されているのである。

復式（または複線式）往復登山はたとえば往路を登路変更更初登攀

または新登頂に取つて帰路を熟知または既知ルートをとるといった場合や積雪期雪崩の発生遭難をさけて他の安全コースを滑降するといった場合などに多く採用される。山が未知区分を失つて来た場合には一般的に遍歴興味本位で個人的に採用されることも多い。従つて登山初心者が自立的に忽ち進むべき第二段階と考へてよいと思ふ。

さてこゝに準往復登山という形態を類別してもよい。それは復式往復登山形態の一変態と考えられないでもない。即ち登山行動根拠地たる出発点とその終結地たる文化圏または普通徒歩旅行地への到着点とが山の大体同じ側で大いには距離的時間的に近接して互に地点だけ異なる場合である。今、Pを山頂と根拠地をAとすればA—P—AまたはA—P—Aは二つの往復登山形態であり、A—P—Aは準往復登山、A—P—B等は横断または他の面への山越え或いは縦走の形態をあらわすであろう。A、Bは東面なら東面と常識上互に遠隔でない諸地点である。今日木曾御岳東側からの登山などはこの準往復登山形態が多く採用されている。

次に往復登山または準往復登山の幾つかの組合せで根拠地またはベースキャンプを移動させて行くものを遍歴（準）往復登山または連鎖状（準）往復登山とも命名しようか。実はこの行き方は古来わが国などで登山と同様山地旅行（山国の旅）にも重きを置いた場合の效果的複数登山の形態であつた。そしてこの遍歴または連鎖状

登山形態は、以下に述べる横断または山越えをも混えて、近代日本登山史上でもたとへば飯豊・月山・鳥海から北海道の高山へと連続して足をのばした故大平茂光先生や、本州中部の諸高山・奥羽の諸名山を歩き登り廻つた故木暮大先輩の自然的に採用したものであり、ちとおこがましいが筆者も大正九年太平洋から日本海までのモットーの下に奥羽の所謂連鎖られた名山探査に従つた方法でもあつた。ヒマラヤ探検においてはしばしばこの形式（形態）によつて未知山地の究明と共に幾つかの雪線上の山越えや六千米級の小登山などを果す幾パーティがあつたのは事実だ。復式連鎖登山、と若し一連の山地旅行を含み勝つるならば、それは世界史的にも個人史的にも探検的要素が豊富であるものといつてもよい。

話が少し先にとんだようであるが、さて根拠地またはベースキャンプを移動させない複数の往復登山は放射線状の登山または放射状登山と称せられ、最近代日本登山界に岩登、谷登、積雪期登攀（スキー登山を含む）など通常路線よりも困難な側の試みまたは新形式登高及び滑降法の採用のために特別に応用された新内容新称呼の登山形態であつた。但し困難な登攀そのものを主体とする性格上必ずしも最高点をめがけられない場合放射線状の登高と称され記さない場合もあるが、それは正しい用語といつてよからう。そしてたとえば穂高酒沢、針木連峰の籠川谷、御宿御沢、鹿島槍カクネ里または谷川岳一ノ

倉沢に拠点を置く例のように、全体としての登山者パーティの行動を別称何々（根拠地名）生活ともいわれて来ている。多くの場合合びし登攀を敢行し且つエンジョーイする放射状登山では根拠地たる中心核は一つであるが、時としては二つ或いはそれ以上に中心を移動して全体としては連鎖状または連珠状の形態ともなり得るのである。

連鎖状放射状登山の典型的好例は今急に思い当たらないが、事実それだけ他の形態との複合が行われていることゝ了解してもよい。たとえば故大島亮吉君等を最初として大正末期から昭和年代にかけて谷川岳東面一ノ倉沢・マチガ沢を主とする諸岩谷を登攀の期待の上から探つて試登と登攀完成が重ねられたのは、多少ともその探査時代には放射線状の登高と単純往復登山とが連鎖状に結合されていたようであつた。また昭和八年夏台湾山岳会・同志社大・立大三パーティ合同の新高山南山方面高所キャンプ及び東山北面新登頂のための長命水キャンプの行も、簡単なが最近中心核放射状登山であつた。最近においては昭和二十七年春早大パーティの岳川谷および明神東稜の二つの連続B・Cに拠る穂高極地法登山の組合せは、中心核を複数とする一連の冬山行の試みにおいて同様のケースであつたと考えられる。

さて登山記録としては、単式往復登山は登頂路のみを記したもので常識上同一路線登降をあらわすものとしてもよいが、復式往復登山または準往復登山では登路降路

共に記載するべきであり、近代的放射状登山の場合は根拠地またはベースキャンプの所在と同時同所に往復コース及び最高到達地点を明記する方がよいに違いない。

往復登山、放射状登山以外の登山形態で最も簡単なものは横断または山越えであり、それから多くは複数的登山（登頂）を目的とする縦走または尾根伝いという片道だけで完結する登山形態が進展過程として考えられる。横断または山越えは多くの場合鞍部・峠・肩等山地の自然的または加工された一部で絶頂よりも低い箇所を一方から他の側に越すもので、それは登山的というよりもむしろ多分に探検的・旅行的意義を包含している。単一の山脈を越すもの、複数的横断をするもの、他の登山形態と組合わされた混然たるものなどに区分出来る。古来著しい例は大部隊（軍隊）でのナポレオンのアルプス越え、佐々成政隊のザラ峠・針木峠越え、近代ではヒマラヤ探検史上に幾つも輝かしい事例が見られ、いづれも新記録または初記録として横断という用語が使えらる。横断で山頂を越す場合には登頂記録としてもよいが、その最初の記録は初登そして最初の横断と併記した方がよいだろう。通常の横断では通過主山稜地点の名称・位置・標高を附記することが新記録としては肝要である。

横断が人類と山岳との交渉史上初期に現れ多分に探検的内容意義を持つていたのに對し、縦走は近代登山界においては多分に登山的内容意義を持つて成立している。但し日本の起伏の少い、峻絶部分

の殆どない山脈ではスポーツ登山時代以前に既に縦走登山形態が存立していた。たとえば奥羽地方羽越境の朝日岳連峰には旧藩時代米沢藩から他藩に通ずる捷路、というよりはむしろ隠密の連絡路として踏査に次いで当時季節的雪線の下は立派な道路が作られて、今日もその一部分が山上所々に残存している。またその朝日連峰を含めて本州中部地方から以北の積雪の多い地方では、昔からマタギ(猟師)の類が熊、羚羊、鹿等を狩すために相当昔から夏山では踏み分け難い藪を蔽う積雪時の山脈を薬靴・皮靴・輪襪・木簍などの雪具を用いて簡単な雪穴などで雪中野営までしながら尾根の上を縦横に走せめぐっていた。宗教的行事としての大和・大峯・山上ヶ岳・弥山などの縦走も修験道の最高の荒行として古くから実行されていた。近代の開山によつて広く知られるようになった日本北アルプスでも、徳川幕府時代山廻り後に大尾根や黒部奥山の山稜を縦走検分させた一、二藩の文書記録と絵図面が残されており、その山廻り後の検分の対象となつた盗伐者等が如何に早く山越または尾根伝いとしていたことが充分に察知できるのである。

細密正確な地図(陸測図)の発売ということもやがて一つの動機となり得た。「山岳」初期の各号が華々しい縦走記録の紀行で埋められていることは知る人ぞ知る。縦走、逆縦走などという用語がスポーツ登山界にまず使われた。しかしこれも広義登山史的に考えて文化史的または記録上の文字を冠した方が大部分穩当であつて、条件付または説明付でなければ中々絶対的に初字を使うというわけに行かない。逆縦走はたとえば槍穂高の縦走が初めは穂高の方から始められたに對し槍から始められたものにつけられた言葉であるが、今日の眼から見れば記録上の順逆に技術上困難の度の差のないが普通の日本の山稜であり、また本質的にいづれが順か逆かは山の表裏という言葉と共に全く便法的なものであり理想的な常識的なものでもあるから、科学的な史的記録としては「○○山から△△山まで縦走(または山稜通過)」の附記だけで結構なのである。

雪線以上の高山脈における縦走は、氷蝕を受けた山岳の各座を結ぶ主稜が余りにも断落していたり長い氷壁であつたりまたは岩なだらけ雪や氷のなだらけのルートであつたりするのが殆どなので日本の場合ほど採用される形態ではないが、双子山(トウインス)のような場合にはたとえば一九五一年フランス隊のナンダ・デヴィ主峰から東峰までを縦走しようとして失敗行末不明となつた試登のように記録がないでもない。また大英英

語のトラヴァースなどといえば、横断または縦断の通過全行程を表わす感じの言葉で、アルプスなどの高度差または峻険度の比較的大きい山岳に對しても使われているようである。しかるに日本の山と山との間はアルプスやヒマラヤほど鞍部と山頂との比高が大きくないし、麓からも峻しさがさしたることはない。従つて縦走といふ一旦山背に登つてしまえば容易に山頂から山頂へと歩登できる形態は、日本など恒久雪線以下の山脈の特殊性であると見ていゝかも知れない。われわれは日本の登山史記述の場合著しく深い溪谷に一度下りて再登高することなしに一つの山脈の二つ以上の目ぼしい山頂を結ぶ行き方を縦走と称し、その季節変則その他の条件によつて記録の小別け区分をしてもよろしい。縦走登山は一時夏山の流行形態だつたものが大正末期頃から新鮮さを失うと共にやゝ勢いを減じ、最近また積雪期における大縦走形態がヒマラヤ登山訓練などをも兼ねて復活、極地法登山とは別に或いはその様式を加味して再び流行の現状である。これに關しては改めて書いた方がよいと思う。さて次に溪谷の遡行上下の形態である。これは一種の登路変更形式であつて、終局点とその山の最高点に登頂するものであるならば何等の特別措置もとるべきではない。しかし黒部川のような大きな峡谷になると、その絶峻部分に触れるだけでも所謂アドヴェンチュアであるので、ために登山の一形態ながら絶頂を無視するに近しい結果の変形々態となつたのである。

これは登山即登高即登頂の通常概念からの見方であること論ずるまでもない。こうしてみると谷でのこの行動は或いは探検として取扱つた方がよいのである。谷行、谷渡り、遡行、遡溪、谷へズリ、何々沢をつめるなどまづ日本特有といつてもいい用語が生れた。「谷は遡る方がよい面白いか、下る方がよい面白いか」などと議論がかわされたこともあつた。黒部の第一人者冠先輩は「大きい谷は下つて行つた方がよい」と断ぜられ、これに對して当時若輩だつた筆者が「やはり遡りつめて山上に出た方がよい」と反駁したことがあつたが、これら両論は共に正しかつたと思う。何となれば畢竟するに探検的の登山的との違いであり、趣味地点の置き方の差であつたからである。

閑話休題、以上で人がその体力により登山(登頂)するが因從來の登山の分野における各種形態について大體述べたと思うが、最近登山形態に言及した点を除いて総括すれば、それらは単独行でも或いは行い得るいわば單純編隊登山(一次元・登山)である。即ち一人以上数名もしくは多くと大きな複数のパーティであつても、各人の分担任務は職業的案内人夫以外では別に特異でなく、いづれもリーダーとひとしく多くの場合同時登頂であり、各メンバーの行動も原則的に同一または近似である。登頂時刻がさまで近似でない大部隊の団体登山、たとえば国体行事の登山競技(?)の如きも、同一路線上で單純編隊行動をとるという原則的観点からやはり同じ

分類に属してもよいと思う。更にまた放射状登山に次いでわが国近代登山界の一傾向となつた複数の集中登山なるものも、相互パーティ間に同時登頂または同期登高の共通目的を除いては有機的連絡が殆どないのが原則であるから、これも同じ分類の双生の一変形として取扱つてもよいであらう。

しかるに近代世界巨峰への遠征探検登山隊の登山形態は、複雑な組織化と任務分担によつて個性よりもパーティとしての最大目的を尊重するための有機的編隊登山(多次元の登山)であり、わが国でも大ヒマラヤを目標とする訓練意義を強調した類形態が、強力に結合された山岳団体・学校山岳部など国内登山においてすら具體化するようになつた。但し最近多次元の登山についての細別分類検討は本稿では扱わない。他日登山記録を蒐集分析して概説的解明を試みるかも知れないことを附記するにとめて置く。

一九五七年度「山日記」は十二月二十五日頃全国一斉に発売の運びになりました。

執筆や調査に御協力頂きました会員各位に厚く御礼申し上げます。また少しでも良いものを作りたいとの態に追いかけていたものですから御願ひのみし、あと仕末の行届かぬ点が多くなりましたことを御詫び申し上げます。

(松丸)

一九五七年度山日記

(三一・三・六)

南極観測隊の 装備について

木下是雄

(第一七四回小集會講演要旨)

来週の水曜日に羽田をたつので十分話の準備も出来ていないのでお許しを願いたい。きょうの話は何か南極観測隊の装備といった大げさなものになつてゐるが、私は村山君には靴の低温実験の話なら出来ると話して置いたので、それ以外の話は出来ないものでそれもご了解を得ておきたい。

南極観測の装備といつても山登りとは大分違う。その違うところを話したい。まずマナスルの登山などと違うところは重さといふことをそれ程考えなくてよいことだ。例えば天幕のポールなどにしても継ぎ合わせたりせず長いままですむ。それから期間がかなり長期間になり少くとも一年は使用しなくてはならないので、節約といふことより、その長期間に耐えられるような丈夫なものでなければならぬ。また南極につくまでに赤道をこえなければならぬ。そんなところがヒマラヤと南極の装備のちがひである。

にもなつてゐるが、実際かぶつてみるのと少し隙間があつて余り具合のよいものではないが、その着想は非常によい。南極は寒さが厳しいうえに風が強いのでその利用価値は多いと思うが、余り感心したものではない。

装備はなるべく種類を多く持つていくといふ西堀さんのお考えによつて、どんなものが必要かわからないまま、ご覧のように靴など実に多種多様なものが出来上つた。この靴について私が行った低温試験の話をしたい。こゝに持参したもののほか普通の短靴、船の上ではゴム靴などがある。

一番最初の、これが(実物を示す)荷上げの時使う靴で、船上作業靴と呼んでゐる。これだけでは氷の上を歩くと滑るので三十六本の短いスパイクのついたアイゼンをつけるようになつていて、船のデッキの上や平らな氷の上を歩くと都合のよいように出来てゐる。

次に夏の上陸基地建設に使う山靴とスキー靴に似たものがある。ヒマラヤの高所靴がそのモデルになつてゐる。中にモルトブレインというプラスチックの材料が入つてゐる。これにガラスファイバーをはさんである。この間はあるだけ凍らないものを使つてゐる。モルトブレインはひどく寒くなると固くなるのがその点不安である。

これに中へ羽毛を入れたヒマラヤなどで使うものと同じ種類のものを持つていく。靴を作る場合汗をどうするか、問題で、汗の蒸発を完全に止めて

しまふといふのがこれらの靴の不安な点となつてゐる。エヴェレスト登山隊の報告などによると靴についてはヴェーバー・パリアーに重点を置くといふところがあるが、これはどうもわからない。今度の靴を作るに当つては、汗の蒸発は止めないように考へて工夫してゐる。

次が長靴の類で、外側がカンパス、その中にフェルトを入れ、さらにカネカロンがつけてある。以上の種類のものは、主として越冬用に使うことになつてゐる。

こゝにある白い長靴はフェルトの靴である。フェルトといふのは熱を伝える度が皮の三分の一である。それにある程度まで汗を蒸発させることも出来る。シベリア人はフェルトだけの靴をはいており彼等は足にはほう帯を巻いただけで直接フェルト靴をはいてゐる。それからヒント靴を得て作つたのだが上等のフェルトといふものは非常に強いものである。はじめは縫目のあるものを作つたが、熱であたゝめながら作れば縫目なしでこしらへることが出来る。不安は濡れることだが、南極では濡れるともよい。実験の結果も非常によく水に対しては五分間は濡れずにすんでゐる。

次にあるのがアザラシの半長靴である。みかけは立派なものだが外側にアザラシの皮が張つてあるといふのはどういふ意味か私にもわからない。これはかなりしめつぽい雪の中でも大丈夫だと思ふ。そういうところが特長なのである。

きょうは持つて来なかつたが、

犬樫隊員のはく靴がある。いままで説明した靴は長期間行動するために作られたものではないが、この犬樫隊員の靴は一週間から十日間ほどの遠征を行うために作られたものである。犬樫は少しでも荷があるとき登りに人が押してやらなければならぬ。今年の春立山で犬樫の訓練をしたとき私もくつ

つて行つたが、犬は平地だと五十キロくらい引つばるが、上りになると人間が押しながつていかなければならぬ。この犬樫と共に行動するには人間も軽く防寒性のよい靴をはかなければならぬのである。そこで底はヴィブラムで、上部はフェルトのあみ上げ靴を作つて持つていくことにした。キヤラバン・シューズに似たもので非常に軽く犬と一緒にしりまわるにはとても都合がよいものだと思つてゐる。

十月九日にこれらの靴の低温実験をやつた。学習院大学の山岳部員をやとい片足づゝ別の靴をはかせて低温室に入れておく、足の先には温度をはかる熱伝導という装置をつけ実験した。足のつま先を動かすことは厳禁し動かさばすぐわかるようになつてくる。(以下幻灯で説明を行う)実験者は一度実験が終ると外に出し、温湯に入れて足をあたゝめさせ、エサをくわし、元氣になつたところでまた実験をつづけた。大体図で示したように靴によりかなりの差が出てくるのがわかる。零下五度前後になると足の先の感覚がなくなつて、あふないといふ感じになつてくる。靴の先は出来るだけたつぷり作らなくてはならない。靴屋に

はこういうふうな作れといつてもどうしたわけか先をまるく作るのをいえてしまふ。特別に細目に作るのがだうまくやつてくれな。この点はいくらいほど靴屋にはいつてやらないと駄目だ。実験は全部ナマのデータである。

(文責任編者) 今冬行われる南極予備観測に参加する本会々員緒方道彦、伊藤洋平、渡辺兵力、中野征紀、村山雅美、木下是雄、島居鉄也、菊池徹立見辰雄、鈴木康、平山善吉、佐伯富男(西堀栄三郎、朝日奈菊雄両氏欠席)各氏の壮遊を祝す飲送会が十月十二日午後一時半から体協会議室で開かれた。若崎から特別に選ばれて観測隊に参加する佐伯宗弘、佐伯安次、佐伯昭治、佐伯栄治の四君も出席、隊員紹介の後渡辺隊員より隊員を代表して

南極観測隊飲送会

「頂上を目指すといふはつきりした目的を持たないだけにやりにくいがあるべく今年の予備観測は地味にやつて来年の本観測をしつかりやりたい。」と挨拶あり、松方副会長からヒラリーはエヴェレストを登つた男としてでなく修練を重ねた男として南極隊に選ばれたものと思つてゐる」とと壮行の言葉があつた。なお一行は十一月八日晴海橋から壮途についた。



会 員 通 信

夜叉神隧道

別宮貞俊

会員中沢真二氏に誘われて、早川の上流で電源開発をしている状況を見るべく、九月四日の十二時廿五分新宿発の準急白馬号で甲府に行き、県庁の県営発電室を訪ねた。

打合せの後自動車を飛ばして西山温泉に午後六時に到着した。新倉より西山温泉までの自動車道は昭和三十年十一月開通して、身延駅からバスが一日五、六回通っている。西山発電所は滑河内合流点の上右手岸で昭和三十一年度内に運転開始を目標として、着々工事が進められている。

翌九月五日午前六時三十分頃西山温泉発、黒河内合流点下手に建設中のダムを一寸見て、奈良田まで自動車を飛ばした。上流を踏査に行く工事事務所の人達と一緒にあったが、奈良田で大夫の用意が遅れて歩いて歩き出したのは七時過ぎた。五万分之一地形図、ならびに廿万分之一地形図に記載されている林用軌道は七、八年

以来使用せず、軌条も撤去され、軌道敷は荒廃に委ねられている。軌道跡を歩いたが、崩壊しているところは高廻りをしたりして、なかなか行程は捗らない。

芦安破山への別れ道を過ぎてなお軌道跡を進み、正午少し前に軌道跡に別れを告げて、川原へ下りた。右岸の水源の道入った二支流の中間辺と覚える。弁當を使つて後しばらく川原を歩いたが左岸から支流が流となつて落ちて居る手前から高廻りをした。川の近くに下つたり、また高くへ行つたりしながら鮎差の少し手前で川へ下り、腰位の深さの徒渉を二回行つて再び左岸へ上り午後四時鮎差へ到着した。

鮎差に昔あつた小屋は今跡方もなく、鮎差沢からひどい押し出しが出ていて、あたりはひどい土砂の堆積である。

工事事務所の人達はこの押出しの上で暮らすので我々一行は軽い食事をして、十六時三十分を出發して夜叉神隧道へのよく踏めた道を上り出した。夜叉神隧道まで随分時間がかかるようにおどかされたが、やはり高距相応の時間で現在工事中の観音隧道の入口に到着したのは一七時五十分頃であつた。

こゝから道路上三〇〇米位で夜叉神隧道である。路面は海拔一、四〇〇米で夜叉神隧道の長さは一、二〇〇米実に立派な隧道である。そして待機していた県の自動車に乗つて、野趣に満ちた生活も丁度十二時間で終りを告げて、午後八時に甲府の客舎に汗を流した。久しぶりで、ワル場と徒渉とを

味つたが、たゞの一日で早川溪谷が味えることは昔のことを考へて感慨が深い。特に感じたことは早川の水の味は黒部の水と比較すると非常に不味い。

九州の旅から

古沢 肇

一、対馬の山
壹岐の島はどこまでも平坦だが、対馬は山岳重畳として山ばかりである。そのわりに高い山といつては一つもなく、そのせいか高頭さんの日本山嶽志はじめて大いの本に對馬の山のことは書かれていない。

しかし、島にはやはり名山といわれる山はあつて、その第一が下郡の白嶽(五一九米)である。古くから信仰登山が行われていて、鶏知の沖合や浅茅湾から仰いでも巨大な白岩の峯が二つ天を指して立派な山容である。また厳原の町の背後には有明山(五五八米)が聳えていて、これが万葉の対馬の根であることはいうまでもない。さらにまた高度は劣るが上郡には御嶽(みだけ、四九〇米)があり、西海岸仁田の海上からその均勢のとれた姿を望み得る。しかし対馬で一番高い山はというと矢立山(六四九米)で、下郡の南端に近く位置している。

今年八月、九州旅行の途次、対馬に渡つたついでにこの山に登つてみようと思ひ立ち、一日、厳原から豆酸(つゝ)行のバスに乗つた。安神(あがみ)でバスを降り、地図を見ながら登つて行くと空には雲一つなく、真夏の太陽は

容赦なく照りつけるのに、見渡す限り矮小な雑木林ばかりで木蔭らしいものが少しもない。漸く標高四四〇米の小乗越に辿りついたときは、暑さに參つて妻ら帽の下で頭がくらくとした。(この乗越は、対馬島誌によれば、あなざ坂というので、嗚呼難儀坂とも記す、と書いてある)もうこゝから矢立山の頂上は、舞石壇山(まいしのだん、五三六米)を経て一投足の距離にある。早春か晩秋の候でもあれば、遠く朝鮮の島影でも望みながら一日の行楽には手頃な山だろ、と想像しながらも、快晴無風灼けつくような暑さには、物好きな自分も根負けがして、眼下の内山の部落へと下つてしまつた。

内山は山に囲まれた盆地の村で、板岩を載せた古い屋根や、炭を運ぶ対州馬の往来などが他國の我々にはやはり珍らしい。少し行くと原生林があつて、樅、檜の原木が鬱蒼と繁つていて、天然記念物竜良(たてら)山原生林と記した標識が立つてゐる。開けば、白嶽や御嶽にも一部分、原生林が残つていて、やはり天然記念物に指定されているということだ。

この原生林を抜けると海が見えてくる。ぎら／＼と煮えたぎつたように光る海の上に、壹岐の島がかすかに浮んでいるのが見えてくると、もう豆酸の村は遠くない。島の南端、豆酸は習俗も珍らしく、島で一番美人の多いところと聞いたが、こゝ暑くては美人の沙汰ではなかつた。

二、五箇荘から椎葉へ
九州の旅も終りに近く、肥後の

五箇荘から日向の椎葉へと越えて、所謂九州の屋根といわれる部分を横断し、できれば国見岳(一七三九米)にも登り、筑紫のはてを一望に収めたいものと思つて歩いたのがこの旅である。

五箇荘へ入るには熊本本の砥用(ともち)からが便利のようだが、自分とはわざと人言市から球磨川の支流川辺川に沿つてバスで五ツ木の宮園まで溯り、それから更に溪谷に沿つて五里の道を歩いたり、トラックに乗せて貰つたりして樺木(もみき)の村へと入つた。五ツ木までは格別のこともない普通の寒村風景だが、五箇荘までくると、さすがに近年開けたとはいへ、山谷の姿が一きわ奥深さを加えてきて、伝説の村にふさわしく一種の妖奇味を漂わせているように思つたのは、折柄の驟雨に山々が白雲に包まれたためでもあつたろうか。

樺木の民家に一宿して、那須越の道を辿る。那須越(一、四八一米)とは肥後の呼称で、日向では五箇越とも樺木越ともいう。(五万分之一図幅には名称なし)迷宮のような里道に暫らく手を焼いて、やがて峠の本道にかゝると、道は一本道で草も刈つてあつて歩き易い。峠の上は木が繁つて眺望がないが、宮崎側に少し下ると一面の茅戸で、耳川上流一帯の景観が開けて全く素晴らしい。暗鬱な五箇の谷から這上つてきて、いま眼前に開けた明るい景色を見ると、日向という国の名さえそれと首肯されるように思われるのだ。峠を下りたとりつきの部落が、椎葉最奥の村、尾手尾(おてのを)

会務報告

十月理事會 十七日(水)

場所 本会図書室

出席者 日高副会長、理事太田折井、金坂、石坂、徳久、松丸辰沼、山崎、評議員渡辺、成瀬監事諸岡、石原

報告

①九州支部設置の件、橋本三八氏および北田正三氏よりそれぞれ申出あり、この間の連絡はあまりよくとれていないようだが、取あえず支部は会員数からいつて県別には無理なので南九州支部(熊本、鹿児島、宮崎)北九州支部(福岡大分、佐賀)の二つの設立を進めている。南九州は北田正三氏、北九州は末松大助氏らがそれぞれ中心となつて準備中で十一月の終りには出来るかと報告が来ている。

(折井)

②学生部の件、同じ程度の学校を二つか三つずつグループにわけて話を進めている。女子学生がふえた程度で特に変わったところはない。遭難対策委員会も文部省の援助を得たのでその方向に持つていきたい。

(辰沼)

③五輪基金募金の件、慶(二組)早(二組)東、日、立、法、明、東京女子大、東京支部女子部、エーデルワイス・クラブなど各団体の協力を得十二組で日暮里、赤羽で募金に協力し二万四千五百七十八円集めた。協力を感謝する。

(太田)

④静岡岳連の件 九月二十二日静岡岳連理事会に出席、明年の国体

について打合せた。明年の国体登山は静岡岳連が日本体協に一任した形で、特別横丫りの出ない限り国体はやれると思うが、確定はしていない。

(金坂)

議事

①国体委員選出の件 牧野、渡辺折井、千谷、金坂の五氏を新委員におす。

②十一月三日マナスル登山隊顕彰式の件、マナスル記念切手発行、横氏の文化功労者、毎日新聞社からマナスル隊員へのメダル贈呈などをかね体協で四時三十分から行う。

③ヒマラヤ委員会設置の件、ヒマラヤに関する資料の収集、調査、研究、ヒマラヤ遠征の審議機関として設置することに決定、具体案は辰沼理事に一任する。

(太田)

全国支部長会議

場所 九月十六日本会図書室

出席者 織田(山陰)後藤(山形)伊藤(福島)藤島(越後)池田(石川)三井(山梨)篠田(関西)木津(富山)大宅(静岡)

沼倉(東京)各支部長本部役員 別宮、日高、松方、岩永、石原、諸岡、渡辺、辰沼、神谷、沼井、成瀬、山崎、村井、太田、松丸、千谷、金坂、藤木、岳連の全国登山大会、各支部の現況報告、国体問題、支部新設、準会員、登山技術講習会、山日記、会員名簿などの件についてそれぞれ懇談した。

小集会

◇第一七三回小集会 九月二十八

日午後六時から体協第六会議室で米人アーノルド氏のアメリカの山々と題する講演がありアラスカのスライドが上映された。

◇第一七四回小集会 十月二十五

日午後六時から本協会議室で会員木下是雄氏の別項の通り南極観測隊の装備についての話しがあつた。

圖書寄贈

マナスル登山隊より次の圖書が寄贈された。

Himalayan Journal 1955-1956
Ditert: Forerunners to Everest
Mason: Abode of Snow
Tilman: Mount Everest 1938
Hillary: High Adventure
Bauer: Siege of Nanga Parbat
Migot: Tibetan Marches
Haimendorf: Himalayan Barbary

Shaha: Nepal and the World
Jackson: More than Mountain
Tucker: Kanchenjunga
Desio: Ascent of K2
Smyth: The Spirit of the Hill
Styles: The Moated Mountain
Smyth: Kamet Conquered
Sen: Himalayas
Bhanja: Mystic Tibet and the Himalaya
Hunt: Ascent of Everest
Kurze: The Mountain World 1955
Tilman: When Men and Mountains Meet
Hunt: Our Everest Adventure
Shipton: Upon that Mountain

Smyth: The Valley of Flowers
Wibberley: The Epics of Everest
Noyth: Scholar Mountain
Noyth: South Col

昭和三十一年十一月廿五日發行

東京都千代田區
神田駿河臺四ノ六

發行所 社團 日本山岳會

編集者 山崎 安治

頒価二十円

電話神田(三)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂